

宮城谷

myagiya masamitsu

昌光

重耳



重耳

宮城谷

miyagitani masamitsu

昌光

ちようど
中

重耳 中（書下ろし長篇小説全三巻）

1993年3月4日 第1刷発行

著者 宮城谷昌光

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―一 郵便番号一一二〇一
電話 文芸図書第一出版部（〇三）五三九五―三五〇四

書籍第一販売部（〇三）五三九五―三六一五
書籍製作部（〇三）五三九五―三六一五

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

宮城谷昌光

1945年、愛知県蒲都市に生まれる。豊橋の時習館高校から早稲田大学文学部英文科に学ぶ。在学中から、「早稲田文学」等に作品を発表。

1990年『王家の風日』（海越出版刊）を出版し、注目を集める。同書は、新田次郎賞受賞。1991年『夏姫春秋』（海越出版刊）により直木賞受賞。著書はほかに、『沈黙の王』（文芸春秋刊）、『俠骨記』（講談社刊）、名作の評判が高い『花の歳月』（講談社刊）等がある。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。なおこの本についてのお問い合わせは、文芸局文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は、禁じられています。

©Masamitsu Miyagitaani 1993. Printed in Japan

ISBN 4-06-206378-6

（文1）

目次・重耳
中

遷都

7

策命の使者

37

称の死

60

二人の王

83

口中の骨

112

肅正

134

驪姫^{りき}

158

陰謀の渦

177

公子分散

199

太子の危機

221

羊神の冠

241

生と死の境

261

兄弟の行方

284

裝幀 菊地信義

重^{ちよう}

耳^じ

中

遷^{せん} 都^と

堵^と上にみなれない旗が立っていた。

城内にみなれない兵がいた。

宮門の外に立っていたのは、側近の猛^{もう}足^{そく}だけをしたがえた申生^{しんせい}であつた。

狐突^{こつ}は胸を衝^つかれた。申生がどういふ感情で自分の帰りを待っていたのか、それが如実にわかつたからである。せつなさが胸を横切つた。狐突自身は、それが自分の感情ではなく、申生の胸中からつたわつてきたものだとおもつた。

「土^し蔦^いどののお帰りですな」

狐突は微笑をつくつていった。申生は狐突の微笑に救われたという表情をして、はりつめていたものを吐き出すように、

「王都にいた土^じ蔦^いは、荀^{じゆん}息^{そく}からの報せで、虢^{かく}軍^{ぐん}が殲^なつたことを知り、王の大夫^{たいふ}である蔦^い国^{こく}の兵を千人ほど借りてきたのだ。が、虢^{かく}軍^{ぐん}が迫っているのであらう。蔦^い国^{こく}の兵をわが城の楯^{たて}としてつかつてよいものか。汝^{なんじ}の意見を、早くききたかつた」

と、早口にいった。

——士蔭には臨機応変の才がある。

と、感心した狐突は、

「なんのご遠慮も要りません。大いにつかうことにしましょう」

と、力強くいった。狐突は申生に一步近寄って、これまで戦闘の内容をかつてまんで話した。

「虢軍には、食糧がないのか」

申生はさあつと顔を明るくした。そのあと、急にべつな感情に襲われたように、顔をこわばらせ、狐突の甲のほころびをみつめると、

「三十にも満たぬ兵で、虢軍と戦つたとは、たれが信じようか……」

と、いいつつ、目に涙を浮かべた。自分だけは狐突の必死の奮闘がわかると申生はいいたい、その敬慕の気持ちで、涙となつてあらわれた。

申生のうしろにいる猛足は、直諫な男だけに、申生の感動がすぐにつたわったのか、狐突をみる目に深い尊敬の色をあらわした。

「いえ」

狐突はいちどうつむいた。虢軍への挑戦をなんら自慢する気はないので、

「けつきよく虢軍の進攻を阻止できなかったわたしより、士蔭どのの着眼こそみごとで、功勲はまさに士蔭どののものでしょう」

と、おだやかにいった。申生はおどろいたように眉をあげた。

「なにを申す。わたしは汝のことを、老君にかならずお伝えするつもりだ」

そういわれた狐突は、かえつて目に静けさをたたえ、かすかに首をふった。申生は唇をあげしく嚙んだ。

虢軍が曲沃に迫った。

堵上で里克とともに俯瞰した狐突は、

「なるほど」

と、つぶやき、澄んだ微笑を浮かべた。狐突は甲を着ていない。里克はにやりと笑い、

「伯行、汝の恐ろしさがわかった。虢軍を半分に減らしたな」

と、いった。なかなかの洞察力である。よくみると、虢軍は二万もいない。四万のはずの軍が、どうして二万以下になったのか。

「荀息どのが働かれたのです」

狐突の答えはあくまで自分を出さない。

「嘘をいうな。荀息は自邑へ帰ったはずだ。虢軍と戦えるはずはない」

「そうではありません。おそらく荀息どのは翼の城が落ちたことを知り、わが老君に乞うて、兵のすくない耿の城を攻めたのです。その報告が虢軍にとどき、虢公に従っていた耿侯はあわてて帰国したにちがいありません」

「ふうん」

里克はおもしろくなさそうに頷をあげた。荀息が曲沃に立ち寄ったときにみせたひとりよがりの態度が、里克のとうがった感情にひつかかっている。里克はまた下をみた。

「魏の軍もみあたたらぬな。魏はどうした」

「さあ、どうしたのでしょうか」

狐突は苦笑した。

狐族の兵による虢の軍馬の攪乱はおこなわれなかったと狐突は思い込んでいたが、そうではなかったことを、ここではじめて知った。攻撃はおこなわれたのだ。ところが狐族の兵が狙った軍馬は、虢軍のものではなく魏軍のものであったのだ。それゆえ、兵車を引く馬を失った魏軍は、脱落したと考えられる。が、そうした詳細は、里克にいう必要のないことである。

つまり里克と狐突とがみている虢軍は、前軍と中軍のみの一万六、七千の兵である。

「終わりましたね」

と、狐突はしみじみといった。

「なんの。明日、虢軍は攻撃を開始するだろう。わが軍が翼から凱旋するまで、ここを持ちこたえねばなるまい」

「それほど虢公は愚かではありませんまい。あとは士蔦どこの交渉が残っているだけです」

狐突のいった通り、夕方に、申生の使者として虢軍を訪ねた士蔦は、すでに翼が滅亡し、曲沃としてはその戦利品を王室へ献上するために、蔦国の兵に護送をたのんだことなどを逐次述べた。

「したがいまして、公の軍が曲沃をお攻めになると、王への献上品を強奪なさる悪業が、天下に知られます」

士蔦は眉ひとつ動かさずにいった。王の卿士である虢公を恐れるどころか、かえって憫しいといつてよい。士蔦にはそういう不敵さがある。

この瞬間、鼻をならした虢公は、天与の好機が去ったことをさとった。

——各国の軍を集めるために、時をかけたのが、まちがいであったか。

と、後悔した。が、それをやっておかないと、王の近くに与党をもっていない弱みがあるので、のちのいいわけができず、いたしかたのないことであつた。

虢公は口をまげたあと、

「その献上品、わしが届けてやろう」

と、ふてぶてしくいった。

「失礼ながら、公の軍には、王都どころか虢までお帰りになる食糧がないと拝察しておりま
す。曲沃といたしましては、今後、晋の正統な継体として王室から認定をいただきたく、その
ためには公のご懇情こんじやうにおすがりしなければなりませんゆえ、どうか、お帰りのときは、食糧を
お申しつけください」

そういつたあと土蔭は口もとに微笑をふくんだ。

土蔭には虢公に私怨がある。十五年前に、周公・黒肩こっけんが乱をくわだてたとき、黒肩に昵比じひし
ていた土蔭は、虢公の裏切りによってあやうく殺されそうになっている。むろん虢公はそのこ
とを知らないが、帰国してから慙愧ざんきの念の強かった土蔭としては、虢公を生涯ゆるさぬつもり
である。

土蔭の目にえたいのしれない強さをみた虢公は、

「ふん、ぬかしたな。よからう、その食糧をもらつてやろう」

と、うそぶいた。虢軍の撤退は決まつた。

——號軍去る。

の報に接した称は、改修した翼の邑を弟の富子にまかせ、おもむろに凱旋の途についた。曲沃の宗廟に戦捷を報告するためと、遷都を告示するためである。以後、晋の首都は絳（赤いという意味がある）と呼ばれ、翼という名称は消える。

ところで晋の遷都についてもうすこしくわしくいうと、翼の滅亡したこの年（紀元前六七九年）からかぞえて、百三十三年前に、曲沃にあった晋の首都が、絳という地にうつされている。

——（周の宣王）十六年、晋、絳に遷る。

と、『竹書紀年』にある。ところがその史書のなかに、まったく唐突に翼という邑の名が晋の首都としてあらわれる。『竹書紀年』の注をみると、称の父の鯀が曲沃の主君として立つたとき、晋侯（孝侯）は翼にいたことになっている。すると、当然、絳と翼とはちがう都と考えられるが、『水経注』におもしろい記述があり、翼の孝侯が絳の名を改めて翼にした、というのである。それならば、ひとつの都邑を、絳と呼び、翼とも呼んだことになる。

称が晋の首都を絳と呼ばせることにしたのは、先蹤にならったにちがいない、翼とはちがう地に新都を造ったのではなく、やはり翼を絳と呼びかえたと考えたほうが、無難なようである。

曲沃へ帰る途上にある称の心情を一言でいえば、

——長生きとは、人生の最大の富だ。

ということになる。ながながと生きつづけたという平凡さが、いかなる困難をもけつきよ

く超越してしまつたことにおいて、非凡となつたのである。

目にうつる山川の青が心に滲みる。これほど風景が若々しく活氣にみちて、しかも美しくみえたことはない。かれは車上で陶然とした。このまま肉体がとろけて、魂がふわりと昇天しても、天上にいる父祖を喜ばず報告をたずさえていけるとおもえば、なにもおもいのこすことはないのだが、

——晋の君主として、周王に拝謁したい。

という一事が、最後の悲願としてあり、かれの心身をねむらせなかつた。

曲沃の庶民はあらそつて城外に出て、凱旋軍を歓呼して迎えた。かれらは出征した家族の者の無事な顔をみつけると、いつそう高い歓声を揚げた。

が、すべてが幸福な情景ではない。死者として還つてきた者もいるのである。称はその者たちの肉親に悼辞をあたえてやりたかつた。

——ふしぎなことだ。

と、称はおもつた。自分の心がますます静まつてきた。眞の勝利とはこれほど静かなものか。ほとんどの顔が勝利に酔い痴れている。称だけが、過去をしきりにふりかえり、同時に、未来を用心深くみようとしていたため、目の前の晴れやかな喧騒をうつろに感じていた。

そうした称の耳目を醒ましたのは、宮門の外で称を迎えた申生や家臣たちではなく、申生のわきに立つていた蔦国である。

——王の大夫、じきじきの出迎えとは……。

意外であつた。戦利品はすでに王都へ運ばれている。わざわざ蔦国が出向いてきたのは、別儀があるためであらう。

蔦国はめだつように一步前に出て、

「やあ、やあ、大慶」

と、甲高い声を発した。

曲沃が無事であつたのは、蔦国の援けによるところが大であるので、車を降りた称は、おのずと腰をひくくして、謝意を呈した。

称は宗廟に木主を納め、戦捷を祖霊に告げてから、宴席を設け、蔦国を招待し、酒食と音楽を燕しんでもらつたが、その席で蔦国は歌舞に興じ、曲沃の重臣たちと歓語しただけで、曲沃訪問の真の目的を一言も漏らさなかつた。

が、翌日、称と二人だけの面談におよんで、

「翼の財宝はたしかにうけとつた。ところが、それらを王に献上することについて、強硬に反對している者が二人いる」

と、蔦国は打ち明けた。

「一人は周公ですな」

称はすでに土蔦から周公・忌父が虢公と親密であることをきかされている。周公としては虢と曲沃とが敵対しているかぎり、曲沃の願望は禁裏に通さぬつもりであろう。

「その周公をけしかけている、たちの悪い男がいるのよ」

と、蔦国は唇をとがらした。

「ほう」

「忘恩を画にすると、あやつの貌になるわ」

「これは、辛烈——」